

前橋の恩人・群馬県令 榊取素彦

特別寄稿
文化国際課
副参事 手島 仁

榊取素彦とは

榊取素彦を一言でいえば「幕末維新の志士から名県令、そして前橋市



「榊取県令訣別の辞」。元老院議員に転任が決まり、帰京する榊取に対して前橋町民の有志が惜別と感謝の言葉をつづったもの 明治17年(1884)8月16日

の恩人」ということになる。榊取は文政十二年(1829)長州(山口県)萩の藩医松島家の次男として生まれ、十二歳で藩校明倫館の儒者・小田村吉平の養子となった。通称は伊之助で、幕府からの追及を逃れるため、藩命で慶応三年(1867)「榊取」と改名した。「榊を取る」としたのは、祖先が「萩藩御舟手組」であったことに因む。幕末維新の国事に藩主・毛利敬親の懐刀として奔走。九州大宰府で坂本龍馬と出会い、薩長同盟への道を開いた。

明治維新政府の「参与」となったが、すぐに免官し帰郷した。その後、再び新政府に仕え、足柄県参事・熊谷県権令・熊谷県令を経て、明治九年第二次群馬県初代県令(知事)となった。在任期間は熊谷県時代を含め十年に及び、本県の基礎を作り上げ「名県令」と称された。明治17年元老院議員に転任。同二十年男爵。宮中顧問、貴族院議員などを歴任し、大正元年三田尻(山口県防府市)で亡くなった。享年八十四歳。

榊取県令と前橋二十五人衆

わが為には苦勞はせぬが／恋し日本に苦勞する／たった一つの糸柱／それに並んで茶の柱／あぶない日本のその家に／四千万のこの民が／住まいするのを知らないか

これは経済官僚の前田正名が高橋是清に送った言葉である。幕末横浜開港以来、生糸と茶が二大輸出品で、わが国はこれで外貨を獲得し近代化を進めた。榊取が県令となった熊谷県は、明治六年に入間県(埼玉県)と群馬県を合わせて誕生した大県で、

養蚕・製糸業が盛んな上に、狭山茶の産地であった。まさに糸柱と茶柱で立っている日本の屋台骨であった。明治九年(1876)熊谷県は群馬県と埼玉県に分割され、榊取は第二次群馬県初代県令となった。県庁が高崎に置かれることになったので、榊取は高崎町民に協力を求めたが得られなかった。下村善太郎を中心とした前橋の有力者25名は、県庁を誘致し、前橋を関東の大都市とするためには、いかなる犠牲をも払う覚悟で榊取に協力を約束した。榊取はその至誠に感動し、県庁を前橋に移す決心を固めた。

前橋二十五人衆とは、次の方々である。下村善太郎・勝山源三郎・勝山宗三郎・須田傳吉・大島喜六・江原芳平・市村良平・竹内勝蔵・横川重七・松井林吉・鈴木久太郎・荒井友七・荒井久七・深町代五郎・八木原三代吉・筒井勝次郎・中島政五郎・田部井惣助・武田友七郎・横川吉次郎・生方八郎・桑原壽平・太田利喜蔵・久野幸人・串田宗三郎



勝山宗三郎 勝山源三郎 下村善太郎 江原芳平 大島喜六 須田傳吉

松陰の魂は上州人の手でアメリカへ

前橋藩は明治三年(1870)藩営製糸所を開設した。官営富岡製糸場に先立つわが国初の洋式器械製糸所であった。その中心であった前橋藩士・速水堅曹の伝習生・星野長太郎は、明治七年生家のある勢多郡水沼村(桐生市黒保根町)に水沼製糸所を開業した。

長太郎は榊取県令の勧奨と援助で、生糸の直輸出を行おうと弟の新井領一郎をアメリカに派遣する計画を立てた。横浜の居留地貿易では外国商人に利益を奪われてしまうからであ

る。領一郎は十二歳で下田沢村(桐生市黒保根町)の新井家の養子となり、十七歳で高崎藩英学校に入学した。同級生に後年「憲政の神様」と称される尾崎行雄がいた。前橋の榊取邸を訪れた領一郎に、榊取県令夫人・寿子は兄・吉田松陰の形見の短刀を手渡した。「この品には兄の魂が込められているのです。その魂は、兄の夢であった太平洋を越えることよってのみ、安らかに眠ることが出来るのです」。

明治九年(1876)領一郎は渡米した。松陰の魂は上州人の手によってアメリカへ渡ったのである。

松陰の二人の妹、榊取の二人の妻

吉田松陰は吉田家の養子で実家は杉家である。松陰には千代・寿・艶(夭折)・文の四人の妹がいた。寿(寿子)は榊取素彦、文(文子)は久坂玄瑞に嫁いだ。玄瑞・文夫妻は子どもに恵まれなかったため、素彦・寿夫妻の次男・道明が養子となった。したがって、松陰―素彦―玄瑞はまさに松陰ファミリーであった。

榊取と寿の結婚は松陰が関わったものではなかったが、榊取との絆はさらに深まった。松陰は榊取を正直で「氣力・詩力・酒力」は自分より上だと敬愛。「江戸送り」のときには松下村塾の後事を託し、「至誠に

して動かざる者未だ之れあらざるなり」(『孟子』)とその思いを伝えた。群馬県令となった榊取は「至誠」をもって県政を行った。寿子は内助の功で夫を支えたが、中風症から胸膜炎を併発し明治十四年(1881)一月に亡くなった。すると母・滝子は久坂玄瑞未亡人となっていた文子に榊取との再婚を促した。文子は「貞女二夫にまみえず」と応じなかったが、滝子は「こうすることが、亡夫・玄瑞や亡姉・寿子、亡兄・松陰の願いであろう」と説いた。これで文子も再婚を決意。いったん杉家に復籍し、名前も美和子と改め、榊取と再婚した。二人の結婚は年譜では明治十六年となっているが、同十四年末に文子は前橋の榊取のもとへやって来た。

寿子は明治九年から十三年まで、文子は明治十四年から十七年まで、前橋で過ごした。



阿久津美保 画

平成27年の大河ドラマ
井上真央さんが榊取素彦の妻役に

2015年(平成27年)大河ドラマ
花燃ゆ

平成27年のNHK大河ドラマが、「花燃ゆ」に決定しました。同作は初代群馬県令・榊取素彦の妻、文(美和子)を主人公にしたドラマ。女優・井上真央さんが文役を演じます。8月にクランクインし、平成27年1月から放送予定。榊取素彦を支えた文の生涯がどのように描かれるのか、期待されます。写真提供/NHK



文(美和子) 吉田松陰



寿子

資料提供協力
群馬県立歴史博物館
群馬県立文書館
山口県文書館
防府天満宮